

事例 第28回「ぶどうの木」

繋がり合う心～自閉症スペクトラムのYくんを通してのクラス作り～

I、はじめに

今回事例を検討するY君には、昨年度担任として1年間関わってきた。入園当初は本児からの要求や意志、疑問などの言葉は少なく、気持ちを読み取るのが難しかった。また周りの人とのやりとりや、教師の声かけに耳を傾ける意識が薄く、自分の思うままに行動するため、それが予想しにくい。高いところに登って手を離したり、飛び降りる等、危険認識も低いようだった。1人遊びが中心で、自分の好きなことには集中して遊んでいた。しかし興味が教室以外の場所にあると別室で遊び込むため、他児との関わりは無く、周りのお友達を視野に入れることはなかった。このようなことから、皆と一緒に活動することが難しく、ほとんどの場面で支援が必要なため、加配教諭が1人付き対応していた。

そんなY君に対して、こちらから多くは働きかけず、本児の思いを受け入れ、納得するまで何事も取り組めるよう見守ってきた。またクラスでも本児についての話をしたり、神様にお祈りをしたり、生活の中で取り上げ、お部屋にはいなくても大切な1人として関わるように心がけた。

その結果、関わる先生達の丁寧な受け答えにより、Y君は徐々に言葉でのやりとりを楽しむようになり、周りのことやクラスの活動にも興味を持ち始め、自ら参加していく様子が見られるようになった。

今回は、本児の特性の読み取り、それぞれの段階に応じた配慮とそれにより見られた変化について事例検討していきたい。

II、子どもの概要

○園児報：Y君（男児）4歳Xヶ月 年中

家族情報：父・母

弟…2歳 別の保育所に通っている

○生育歴

※以下今年度4月に母親に記入していただいた、フェイスシート・聞き取り調査をもとに記載した。

【出生時】出下時体重 3244g

【乳幼児期】歩き始め …10ヶ月

意味のある言葉 …1歳4ヶ月

【入園前の様子】

・1歳半健診では、多動傾向と言葉の遅いことを指摘されたが、ほぼ年齢相応と判断された。

3歳児健診では言葉が遅いこと、呼びかけに反応しないこと、かんしゃくやこだわりがあることなどを指摘され、発達障害の可能性があるとのことであった。「乳幼児の心とことばの相談」を勧められ、令和2年1月にK保健センターに行き相談をする。そこから療育に結び付き、K児童発達支援事業所に通うようになった。

・Uクリニックに連絡するも4か月待ちと言われたが、5月には受診でき、作業療法も受けた。言葉がよく出てきているとのことで令和3年春から言語療法も加わり、定期的に通院をしている。

・Uクリニックで「自閉症スペクトラム」と診断された（3歳4か月頃）。

【アレルギーに関して】

もともとアレルギー体質であり、3学期に自宅で食べたケーキでアレルギーを発症した。アーモンド・カシューナッツ・ピーナッツ・クルミには強い反応が出るため、エピペン対応となった。

Ⅲ、1 学期について

①入園～1 学期の様子

1 学期には、火・木・金の週 3 登園した。本児の行動は出来る範囲で制限せず、興味関心や持ち味などを観察するようにした。

【自由遊びについて】

(1) 主に 1 人遊びが中心で、加配の教師を交えて遊ぶこともあった。興味関心があることには、大体 20～30 分間遊び続けた。おままごとやトミカ、積み木を好んで遊んでおり、自分でお話の世界を作りどんどん見立て遊びを展開していった。遊びに満足すると、きっぱりとやめて、次の遊びに移行していった。

6/26 記録：チェーンリングや材料を沢山のせ「シナモン！小さじ一杯！塩かけて！」と言いながら大盛りのご馳走作りをした。あひるやアンパンマンの人形に、作ったお弁当等を並べて「食べてくださいね」と並べていた。

8/4 記録：ミニカーを動かしながら、「あそこにいる、おーい車」「へんだな」等と車との会話を広げ大事にしながら楽しむ姿が見られた。

(2) 信頼できる教師の模倣で、遊具を丁寧に扱う姿があり、心の安定が感じられる。家庭保育での保護者の丁寧な関わりにより、遊び方や言葉遣いに、優しさや温かさが感じられる。

【生活面について】

(3)・自分の落ち着く場所を見つけ、加配の先生と共にゆっくりと 1 日を過ごせるようになった。クラス以外のお部屋に滞在することが多く、「ぱんだ組（本児のクラス）に行こう」と繰り返し意識的に声をかけていると、次第に自分のクラスの意識が芽生えてきて、自らお気に入りのトミカを持って移動するようになった。

・遊びから給食、外遊びから入室など切り替えに時間がかかった。「おもちゃはねんね」と伝えたり、トミカでクラスに誘導し他児の様子を見て、少しずつ移行していくようになった。そのうち、食前

のピアノの音や周りの子どもたちがいないことの決まった合図を感じ取るようになり、時間はかかるが自分で切り替える事も出てきた。

(4) 新たに身につける物は不快なようで、上靴・靴下を登園後すぐに脱ぎ、履かずに過ごしたり、紅白帽子も被るのを拒み、家庭で被っている物を使用していた。慣れた園内（ホール、各クラス、絵本の部屋）を好きなように行き来するが、外遊びには気持ちが向かず、なかなか遊びにいけなかった。

(5) 不快なときは全てを「だめ」と言って表現した。排泄の交換、食事で嫌いなものがある時、お友達におもちゃを使われてしまった時に表現していた。

④1 学期を通して見えた、幼児理解の仮説

※「入園～1 学期の様子」と番号がリンクしている。

(1) 本児自身の心が動き、自ら選択したことに関しては、何度も繰り返す楽しむことができる。

(2) 本児に関わる周りの丁寧な関わりや配慮によって、園生活やクラス活動に参加していくことができる。

(3) 何かを伝える時に、視覚的に分かるよう、具体的な物や言葉で教えると理解しやすく、次の行動にも移行しやすい。

(4) 身の回りの変化や、新しいことに対して、敏感さがあって、順応に時間がかかる。

(5) その都度、状況に応じた適切な言葉を伝え、援助することで、言葉で伝える方法を教えていく必要がある。

Ⅳ、2 学期について

①1 学期の仮説を踏まえた 2 学期の指導のねらい 2 学期の本児のねらいを以下のように設定した。

(基本的な生活習慣)

朝のお支度の支度や給食の準備、片付けに興味を持ち、教師と一緒にやってみようとする

(コミュニケーション)

自分の気持ちを言葉や行動で表現しようとする。

(遊びの様子)

教師との関わりを楽しみながら、遊びを深めていく。

(運動)

体を動かす楽しさを知る。

②生活発表会までの取り組みについて

2 学期になり、少しずつクラスへの意識が芽生え初め、クラスで過ごす時間が増えてきた。本児が生活発表会「はらぺこあおむし」に参加するまでの過程を、日ごとの行動の変化と共に検討していくことにした。

●9月8日(火)

ぱんだ組の部屋に来て、礼拝のロウソクが付いているのを初めて見て「ロウソクだ！」と言い、吹き消そうとした。お当番さんが火を消すのを見て、とても目をキラキラと輝かせていた(支援時 日誌より)。これ以降、礼拝時にクラスへ戻って来て、火を吹き消そうとするようになった。本児が活動に参加出来るようになってきた為、クラス全体で「Y 君はゆっくり大きくなるお友達、いつか出来るようになるから、おめでとう応援してあげようね」と、今はまだ皆と同じように話を聞いて活動に参加は出来ないが、いつかは出来るようになることをお話しした。本児がクラスで過ごせるたびに、「Y 君来たね、一緒に出来たね」と取り上げていくようにした。徐々に子どもたちも意識し、来たよ！と教えてくれるようになっていった。

●9月29日(火)

園舎の窓から、Y 君が園庭を見ているのに担任が気がついた。園庭から他のお友達と共に、窓から見ている Y に向けて「Y くーん！」と声をかけた。加配の教師が「外に行く？」と声をかけると、「そとにいく！」と部屋を飛び出し遊びに参加出来た。その後、担任を追いかけ走って遊んだ。

●10月1日(木)

一人でステージに上がり、歌を歌ったり、踊ってみたりしていた(支援児日誌より)。少しずつ発表会への意識が出てきた様子であった。

●10月9日(金)

初めてクラスで生活発表会の練習をしている際に、一緒にステージに上がり雰囲気を楽しんだ。本児が来たことで、クラスの子が動揺し発表会の流れで出来なくなることを懸念して、「Y 君も来たよ」と伝えた。他児は動揺することなく、いつもの流れで練習した。練習後には「Y くーん！」とみんなで名前を呼んだ。

●10月13日(火)

朝からぱんだ組のお部屋で混ざって遊んでいた。他児が「Y 君は火曜日のあおむしだよ」と発表会での役割を教えてくれた(支援児日誌より)。

●10月16日(金)

クラスでは初めてカスタム・蝶ネクタイを付けた。本児は身につける物に興味を示さず装着していないが、自分なりに練習に参加しており、出番がくるまで「しーっ」と待って、自分の番が来るとそれ以降からエンディングまでステージに出続け、ウロウロしながら発表会の雰囲気を楽しんでいるようだった(支援児日誌より)。後日、同じ放課後保育で一緒にいることの多い年長児 2 名と装飾品を身につけ、本児の遊んでいる別室にカスタムを届けに行き、「Y 君のもあるよ」と見せた。その時は反応を示さなかった。その後も日を変えて何度か見せにいった。

●10月20日(火)

補助教諭が演出で背景に果物をかける動作を繰り返し行っているのを見て、突然本児もそれを真似て果物の取り外しをして参加した。その場で臨機応変に対応、補助教諭も本児が取り外し出来る

ように配慮しながら進めていった。突然のことに、担任も練習中の子どもたちへ「Y君来たけど、いつも通りに！」と伝えた。他児は気を取られながらも、自分の立ち位置・セリフを思い出して練習を続けた。最後の歌の所では、年長児がカラーボックスに上るのだが、一緒に上がったY君が落ちないようにと気にしていたり、「Yくんはいいよね」と本児を受け入れようとする声が聞かれた。

年長児が劇の最後で蝶々になる演出を、パネルを持って表現するため、本児も同じように参加しようとしたときの為に、本児用のパネルを用意した。

●10月23日(金)

クラス活動の際に、横のおままごとコーナーでおままごとやお絵かきをしながらではあるが、一緒のお部屋で過ごすことが出来た。放課後保育でも、ステージに上がりカラー積み木の階段を運んで、自分のイメージの場所において発表会を思い描いていた。(支援児日誌より)

●10月24日(土)生活発表会本番

母親にステージ袖に来てもらって、そこで一緒に座って参加した。本児なりに、自分の役割を感じて、自信満々に参加していた。またクラスの子どもたちや教師も、本児の動きがあっても、いつも通りに、一緒に発表を作り上げることが出来ていた。

●生活発表会後

発表会の取り組みは、終わった後も劇ごっことして続いていた。加配教諭と一緒に、発表会の初めから最後までを歌・リズム遊び・セリフ・背景の道具の移動等を再現し、1日に何度も繰り返し、2学期いっぱい楽しんでいた。

【生活発表会の取り組みを通じての変化】

クラスのお友達が、本児の名前を呼び、声をかけてくれ、受け入れる気持ちが伝わって徐々に意識が変わっていった。生活発表会に向けての、クラスから響く歌声・劇遊び・ステージを使っただけの練習を近くで感じて、本児の心が動き、共に作り上げる喜びを共有し、感じたからこそ参加することが出来た。本児への配慮が、クラスがさらに1つになるきっかけとなった。

④2学期の指導のねらいの反省

(基本的な生活習慣)

朝のお支度の支度や給食の準備、片付けに興味を持ち、教師と一緒にやってみようとする。

→給食の準備は、教師に促されながら少しずつ出来るようになってきた。登園後や帰りの身支度にはまだ意識が向いておらず、教師が全介助していた。

(コミュニケーション)

自分の気持ちを言葉や行動で表現しようとする。
→周りの人から受け入れられたことで、自分なりの表現で、気持ちを表現していくようになった。

(遊びの様子)

教師との関わりを楽しみながら遊びを深めていく。
→1学期に比べ、クラスで遊ぶ時間も増え、たとえ加配教諭とのやりとりであっても、周りの子どもたちのことも感じながら遊ぶようになっていった。2学期になると、1人で楽しんでいた見立て遊びが、教師とのやりとりを交えたごっこ遊びへと変わっていった。

(運動)

体を動かす楽しさを知る。
→外遊びに行けるようになったり、クラスでピアノに合わせて体を動かすリズム遊びに参加したり、外へ意識を向けていくようになった。

V、3学期、1年を通じて

①3学期のクラスとY君の繋がり作り

3学期になり、お部屋にいられる時間がぐっと増え、お友達と遊びを共有する姿も見られるようになった。2学期に沢山楽しんできた「はらぺこあおむし」の絵と本児の名前で飾りを作り、それを椅子の背もたれに本児と一緒に貼って、特別の椅子を作った。これは、本児がいなくてもクラスには居場所があることを伝えたい思いと、他のクラスの子どもたちが仲間の1人として関わって欲しいという思いからだった。

クラスに椅子について話してからは、「Y君の場所はここだよ」と声をかけてくれたり、椅子を準備してくれる子が増え、より一層繋がりが深まったように感じていた。

②1年を通じて

入園当初は、クラス活動には全く興味が無く、お友達との交わりも少なかった。1人遊びが中心で、クラス以外に興味を持っていたため、別室で遊ぶことも多く、お友達の繋がりを作れなかった。しかし毎日の丁寧な関わりを積み重ねて行くことで、関わる教師のやりとりを心地よく感じられるようになり、幼稚園が安心出来る場所になってきたことで、少しずつ周りにも目を向けていくようになった。

2学期の生活発表会を通じて、自分のクラスを認識し、お友達との関わりにも触れられるようになり、やる気を持って活動に参加することが出来た。そして、1つの事を皆と一緒に成し遂げることを経験した。本児が来てくれることで、受け入れる心が他の子どもたちにも育っていった。心の繋がりがより一層深まり、3学期にはクラスが安心出来る場所となった。別室に興味があり遊ぶこともあるが、お友達と共に過ごせる時間が増え、本児が他のお友達の名前を呼ぶこともあった。本児のことを、皆が想い、大好きな存在となっていった。